

# 東方雛ちゃん小説活動 記

ミカリん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「雛ちゃん!!今回は小説での仕事が来たぞ!!」

「え!?!それ本当なの?」

「やってることはいつもと同じでいいそうだ」

「ギャラはどうなってるの?」

「ボランテアかつ製作者が別なのでありません」

「嘘でしょ!?!」

Androidアプリとして配信中の東方二次創作、東方雛ちゃんシリーズのノベラ

イズっぽい雰囲気の三次創作です。

再構成に近い感じで連載していかうと考えています。

製作者いすい様に許可申請済み。

規約に違反するのでURLはユーザーページと活動報告のみに記載しています。

※念のためアンチヘイトタグをつけてはいますが作中の雛ちゃんの扱いはあくまでもバラエティ番組で許される程度のいじりであり、いじめ等につながる描写はしておりません（製作者様からも要望を受けています。）

それでも苦手な場合についてはお手数ですがブラウザバックをお願いします。

# 目次

断章：キャラクター紹介

軽いキャラ紹介とか | 1

序章：雛ちゃんいじり編

雛ちゃんの日常 その1 | 4

雛ちゃんの日常 その2 | 9

雛ちゃんの日常 その3 | 14

1章：雛ちゃんケツKicker編

雛ちゃん、多額の借金!?! | 21

雛ちゃんの借金返済生活!?! | 31

雛ちゃん、目指せ完済!! | 37

雛ちゃんいじり、返済生活? | 45

雛ちゃんの借金返済!!後半戦 | 52

## 断章：キャラクター紹介

### 軽いキャラ紹介とか

・雛ちゃん

ご存知東方風神録の2面ボス、鍵山雛。

今シリーズではいじられキャラとして愛されていく主人公でありヒロイン。

色々されても心の中ではおいしいと思っている。

悩みは原作及び黄昏フロンティア作品での出番のなさでギャラの低さ。

自分では幻想郷で一番の美少女と想っていたりするアホの子。

現代でのお仕事は主にリアクション芸によるバラエティ的な役回り。

・お兄さん

ゲームをプレイしていたらわかる男性と思われる人物。

雛ちゃんたちの居候している家の管理人的な人物と思われる。

にとりたちと一緒に積極的に雛ちゃんをいじってはいるが心の中ではかわいいと

思っている。

おそらく正体は○○○（名前を伏せていくスタイル、そしてずっと正体には言及しない）

体型は結構筋肉質で細マッチョと思われる。多分イケメン。

関係ないが東方の原作とかにはいない製作者オリジナルキャラのために本小説にはしつかりオリキャラタグがつけられています。

・河城にとり

雛ちゃんと同じ東方風神録出身の河童。3面ボス。

幻想郷と現代を自由に行き来できるのは多分彼女のおかげ。

様々な発明品を開発している第二の主人公。

でも発明品のほとんどは雛ちゃんをいじるために使われていたりする。

なんだかんだ言ってもみんなのことは大好きなはず。

でも一般的な二次創作に見られるのと雛にはならないのがこのシリーズ。

ちやつかり発明品の一部は有料販売していたり雛ちゃんの知らないところで黄昏フロンティア作品に出演していたりと結構フリーダムに楽しんでいるところがある。

・伊吹萃香

東方萃夢想にて初登場した鬼の少女。

にとりたちと同じくお兄さんの家に居候している。

幻想郷の外では大きな力は出せないらしいがそれでも酒が強いなどは変わらない。

本来最初の雛ちゃんいじり系には出ていないが今回は積極的に出演していく予定。

原作以上に可愛い。鬼は嘘をつかないということをよく店番などをしていたりする。

以下、キャラクターは追記していきます。

文字数が少し余ったので軽く世界観の説明を。

現代のある場所にある雛ちゃんTownと呼ばれる地域にて雛ちゃんたちは暮らしている、というのが私の解釈です。

そして、ノベライズの体で自分なりに雛ちゃんたちの暮らしを表現していけたらと考えています。

今はまだ雛ちゃんシリーズのみですが、もしかしたらレミアの方も許可が取れたら組み込めたらと考えています（最新作ではコラボしていますし。）

よろしくお願いします。

# 序章：雛ちゃんいじり編

## 雛ちゃんの日常 その1

とある日の現代にある雛ちゃんTown。

今日も晴天、気持ちのいい風が空を流れています。

「雛ちゃん!!今日は小説での初仕事だ!!」

雛ちゃんTownに住む管理人のお兄さんが1枚の資料を持って部屋へとやってきました。

彼が話しかけているのはフリルのゴスロリファッションのドレスに身を包み、頭に大きなリボンをつけている緑の髪の少女：幻想郷からやってきた厄神、鍵山雛である。

「え、今日がそうなの!?!」

事前に雛ちゃんに知らせることなく決定した今回の企画に、本人も戸惑っているようです。

そこに、カートを押してやってきた一人の少女がいました。

「厄神様、お祝いのケーキを持ってきましたよ。」

緑の帽子をかぶり小柄な体型で胸には鍵がついたペンダントをした少女。



そう、河童の河城にとりです。

「あら、美味しそうなケーキだわ!!」

雛ちゃんもうれしそうにケーキに反応しています。

しかし、もうカメラは回っているのです。

お兄さんはケーキを取り：

「そおい!!」

ケーキを雛ちゃんの顔にたたきつけてしまいました。

もちろん、後ほどこのケーキはスタッフが美味しくいただきます。

「ふべっ!!」

雛ちゃんの顔はたちまちクリームまみれになってしまいました。

雛ちゃんは怒って文句を言っていますが、そこに騒ぎを聞きつけて萃香がやってきました。

「お、なんだい？随分にぎやかになってるけど準備はすすんでるのかい？」

この様子を聞きつけたか部屋にはもう一人の少女が入ってきました。

伊吹萃香。鬼と呼ばれる種族の一人であり頭には角がついている少女です。

「あ、萃香様。ちようどいいところに。」

にとりがそれに気づき反応をします。

「え、ケーキのくだりはスルーなの？」

雛ちゃんはとりあえず顔についたクリームを近くにあったタオルで拭き始めました。

「小説デビュウかあ、なんだか緊張しちゃうねえ」

萃香はのんびりとした様子でカメラに向けています。

しかも、そこにカメラに映っていない雛ちゃんの頭にタライが降ってきたみたいで  
す。

「うおい!!タライまで降ってきたわよ!!」

雛ちゃんが横で喚いています。がカメラは萃香を映している上にこのシーンはオンエ  
アされないので関係はありませんでした。

「この部屋もだいぶ立て付けが悪くなっているからねえ」

「いやどう考えても故意でしょ今のは!!」

そこにもあまりにも喚いているのでとりが雛ちゃんをなだめるべく炭酸のコーラの  
缶を配りました。

「まあまあ、このコーラでも飲んで落ち着いてくださいよ」

「あら、珍しく気が利くわね」

雛ちゃんがうれしそうに乾杯をして缶を開けた瞬間、なんとあからさまに缶を振って  
いたのかコーラが勢いよく吹き出てきて顔にかかってしまいました。

もちろんこれも演出のひとつ。仕掛け人はもちろんにとりです。

「おい!!」

そこに雛ちゃんがまた喚きだしましたが更なる真実が明かされました。

「あ、カメラ回ってなかったので今のはお蔵入りですね」

「まさかのやり損!?!」

にとりの冗談に対してまた騒ぎ始めた雛ちゃん。

顔面も服もコーラまみれになりましたが、コーラも滴るいい女です。

そこにお兄さんが収録終了の時間だと合図しました。

「え、もう終わるの?」

雛ちゃんはそう尋ねました。

「今回の資料によりますと、雛ちゃんいじり3部作については尺が短めになるって書いていますね」

にとりが冷静に書類を手に取り読み上げました。

「え、まだ私全然会話してないわよ!!」

雛ちゃんも尺の問題に対してはかなりご立腹の様子。

「今日は、メインの4人の顔見せが目的のプロローグの扱いみたいだ。まだまだ続くからネタは小出ししていくみたいだね」

お兄さんがそれに付け足すように資料をまた解説していききました。

「しようがないわね。でも、次は私も活躍するわよ!!」

そういつて雛ちゃんは満足げに締めようとしています。

「あ、そうだ厄神様。これももうカメラ切れてるんで。」

にとりが最後に大変な事実を告げていきました。

「はあ?」

雛ちゃんもびつくりのようです。

「ついでにギヤラも短いからなしてみたいですね」

更にとりが追い討ちをかけてきます。

「私の活躍はなんだったのよ〜…」

雛ちゃんが落ち込んだところで、お兄さんが本当にカメラを止めました。

その後についてはこれからみんなで外食にでもいくようです。

「雛ちゃん、明日も収録があるからがんばってね」

お兄さんは最後に明日もあることを教えてくれました。

「…それなら話は別よ!!今日はたくさん食べて明日は今日より大活躍するんだから!!」

雛ちゃんは次の収録に対して熱意を語り、本当に今日の収録は終わりを告げました。

これからも雛ちゃんたちのにぎやかな日常は、まだまだ続きそうです。

## 「雛ちゃんの日常 その2

今日も今日とて雛ちゃんTownは平和で穏やかな日々。

もちろん、住人たちも平和に暮らしています。

「うーん…もう少しで倒せそうなんだけど…」

雛ちゃんは仕事がないので今日はテレビでゲームをしているみたいです。

「…ああ!!」

雛ちゃんが大声を上げたのとテレビの画面が消えてしまったのはほぼ同時でした。

お兄さんが雛ちゃんの前を通り過ぎていった際にコードをひっかけて電源コードが抜けてしまい、ゲームの電源が切れてしまったのです。

雛ちゃんもたまらず怒ってしまいますが…

「あ、厄神様何してるんですか?」

にとりがアメを持ってやってきました。

「このアメでも舐めて元氣出してくださいよ」

にとりが持っていたアメに興味を示した雛ちゃんはアメを要求すると珍しく素直に渡してくれたので雛ちゃんがそれをすぐに舐めると…

「す、すつばあああああ!!」

雛ちゃんが口を窄めて叫んでしまいました。

「あ、これ梅干だ」

にとりは飴玉と梅干を間違えて渡してしまったのです。

雛ちゃんをあわてて水を飲み、部屋から出て行ってしまいました。

「…ふう、生き返ったわ」

雛ちゃんが水を飲んでリフレッシュしているとどこからか甘い香りが流れてきました。

雛ちゃんはそれに誘導されるようにふらふらと甘い香りの元となる場所にやってくると、外にある机にビンが落ちていました。

それに雛ちゃんが近づいた瞬間、落とし穴が作動して雛ちゃんが落下してしまいました。

「このように、この匂いを使えば簡単に雛ちゃんを誘導することができます。」

「どうやら、お兄さんが雛ちゃんをおびき寄せるための発明だったらしく、合流したにとりに説明をしていたみたいです。」

「じゃあ今度は私の発明ですね」

にとりが今度は懐から怪しげなスイッチを出してきました。

「それは何のスイッチだい？」

お兄さんは今度のにとりの発明に興味を示したみたいです。

「厄神様の頭部が巨大化してしまうスイッチです」

そういつてにとりがスイッチを押すとちようど落とし穴から抜け出してきた雛ちゃんの頭が謎の原理で巨大化してしまいました。

「な、なんなのこれ!？」

雛ちゃんもさすがにあわててしまいました。

また、たまたま散歩から帰宅してきた萃香がそれを目撃したため泣きながら逃げ出してしまいました。

それから数時間後、効き目が切れて元に戻った雛ちゃん。

お兄さんがその間にピザを焼いてくれました。

「あら、今日の昼ごはんはピザなのね」

雛ちゃんは嬉しそうに食卓に着きました。

お兄さんがその後すぐに熱々の焼きたてピザを運んできました。

「そおい!!」

お兄さんはピザを運んでくるといきなり雛ちゃんの顔にピザをたたきつけてすぐに

また戻ってしまいました。

「雛ちゃん、お詫びにプレゼントを持ってきたよ。」

そういつてお兄さんが今度はプレゼント箱を持ってきてくれました。

「マジで!?!いいの?」

雛ちゃんは顔についたピザを処理し終えるなり機嫌がすぐに回復し嬉しそうに開けていいかどうか尋ねています。

お兄さんはそれを快諾し開けるように指示をすると雛ちゃんが嬉しそうに箱を開けました。

中身は、空っぽでした。

「はずれだああああ!!」

お兄さんは嬉しそうに叫んでそのまま立ち去っていきました。

雛ちゃんも真顔になってしまいました。

「あ、厄神様。今日もこれでおしまいなのでもう帰っていいですよ」  
にとりがそこに現れるなり今日の収録は終わりだと告げました。

「え、私まだ全然しゃべってな…」



…ここでカメラの録画が切れてしまっていました。  
雛ちゃんの叫びは、誰にも届かなかったのでした。  
めでたし、めでたし。

「…私の出番は？」

「萃香様、あとで出番がたくさん来るから厄神様の顔にたくさんパイを投げつけるス  
イツチで遊んでいてください。」

…その後、雛ちゃんの顔はパイまみれになってしまいましたとき。  
本当に、おしまい。

## 雛ちゃんの日常 その3

まるで変化のないくらい穏やかな雰囲気を保っている平和な雛ちゃんTown。

今日も雛ちゃんと愉快な仲間たちが楽しく和気藹々と…

「雛ちゃん、ちよつと大事な話があるから歯を磨きながら聞いてくれないか？」

「なあに？」

「歯磨き粉の中身をわさびにしておいたからね」

「ぐふうあ!!」

…いいえ、楽しくバラエティ精神豊富に、ですな。

今日もまた雛ちゃんが体を張って視聴者さんを楽しませているようです。

ちなみに今回は朝起きて歯を磨こうとした雛ちゃんにお兄さんが話しかけたので歯を磨きながら聞こうとしたら時すでに遅し、わさびで歯を磨いてしまい急いで口の中をゆすぐ事になってしまいました。

「げほっ、げほっ…」

むせている雛ちゃんも流石の美少女。とても可愛く映っています。

「さあ、そろそろラーメンが茹で上がる頃だな」

お兄さんはそれだけ言うとおっさり台所に戻っていつてしまいました。

「え、今の流れはスルーなの!？」

雛ちゃんは仕方ないのでそのまま歯を磨いていきました。

もちろん、使ったわさびはスタツフが後ほど寿司を食べる際にいただきます。

その後、今日の服に着替えるために部屋に戻ると：

「…服の襟が取れちゃったわ」

どうやら、今日着る予定だった服の襟が取れてしまっていたようです。

わからない読者のために説明すると雛ちゃんのあのドレスの首まわりの白い部分です。

「しようがないな、直してあげるよ」

お兄さんがちょうどご飯が出来たことを告げに来たところ、この現場に遭遇したため直しておいて上げるから朝ごはんを食べてきたらと言ったので雛ちゃんは食卓に向かっています。

お兄さんはすぐに襟の修理に取り掛かります。

「あ、厄神様。おはようございます」

「やあ、おはよう」

食卓には既ににとりと萃香が座っていて食事を始めています。

今日の食事はラーメン。しかし雛ちゃんの分のお箸がありません。

「ちよつと、私の箸がないのにどうやってラーメン食えつて言うわけ？」

雛ちゃんはお箸がないことに文句を言い始めました。

そこににとりが立ち上がり雛ちゃんのラーメンのどんぶりを持つと…

「そおい!!」

「ぶっ!!」

もはやお決まりのパターンですね。

にとりが雛ちゃんの顔にラーメンをたたきつけました。

もちろんこのラーメンもスタツフが美味しくいただきます。

「さて、また食べますか」

「(づ)ちそうさま」

そして二人とも平然と食べ進め、傍観者だった萃香に至っては食べ終わって食器を提げて立ち去りました。

恐らく食後の飲酒なのでしょうが見た目は可愛い女の子なのでカメラに映すことは出来ません。

「いやこれもスルーなのかよ!!」

雛ちゃんは喚いていますですが誰も反応せずにとりも食べ終わりまた研究に取り掛かり

始めました。

そして仕方なく顔のラーメンを処理してまたお兄さんのところへいくと襟がもう直っていました。

お兄さんはまた部屋を立ち去り雛ちゃんが誰もいなくなつたところで着替えると…

「…いやこの襟はおかしいでしょ!?!」

そう、雛ちゃんの服の襟が大きくなりしかも反りたつてまるで悪のボスの服みたいに自立してしまつていたのです。

どうしようもないので服をまた着替えて、気分転換に散歩に行く…

「この時代、かしこさが物を言います!!」

道端でいかにも怪しそうなお兄さんが本を売っていました。

「確かにかしこくなつたら仕事が増えるかもしれないわね、お兄さん!!」

雛ちゃんはあっさりと本を買ってしまいました。

値段はなんと2万円。しかしそれでも雛ちゃんは躊躇うことはありませんでした。

そして色々回つて帰ってきたらお兄さんが出迎えてくれました。

「騙されずにかしこく生きるための本を2万円で買ってきたわ!!これで仕事もいっぱい

…」

雛ちゃんは騙されていることにも気づかずドヤ顔で自慢しています。

ドヤ顔の雛ちゃんもとっても可愛いですね。

「…」

お兄さんも何も言えずにいたらにとりが現れました。

「厄神様、ここにいたんですね」

にとりはどうやら雛ちゃんに用事があるみたいでした。

どうやら研究室に何か新しい発明があるみたいです。

雛ちゃんとお兄さんも一緒に研究室についてきます。

「これがゲームの世界に実際に入れる装置です。」

にとりはまたもやすごい発明をしていたみたいです。

3人でゲームの世界に入り色々解説をした後はみんなで行動をしていきます。

「死ねい、雛ちゃん!!」

「ぎゃあああ!!いきなりPK(プレイヤーキル)かよ!!」

お兄さんは武器を装備すると雛ちゃんに攻撃を仕掛けてきました。

ダメージの数値は9627。雛ちゃんの体力は0になり棺桶送りになりました。

「復活するためには7兆円必要なので復活したいならお金を払ってください。」

にとりは驚愕の値段をつけてきました。

このゲームはにとりが作ったゲームなのでそういう額もあるのでしよう。

「そんな国家予算持つてるわけないでしょ!？」

雛ちゃんがそれに対して文句を言っていると、敵ボスに当たるドラゴンが現れたのでお兄さんたちは反撃を開始しました。

しかし、倒しきれずドラゴンの攻撃が始まりました。

「じゃあ雛ちゃんを盾として使おう」

お兄さんはあるうことか雛ちゃんの入った棺桶を盾にしてドラゴンの攻撃を防ぎ始め、その隙ににとりがじわじわと削っていきます。

「ぎゃああ!!あんたら呪われろ」

雛ちゃんが棺桶の中でまた騒いでいるとにとりの攻撃でドラゴンが倒れました。

どうやら体験版だったらしくすぐにまた現実世界に戻ってきました。

「はあ…ひどい目にあったわね」

「ちなみにこれ、完成したら厄神様に遊んでももらいますので」

「前言撤回、先に遊べてよかったわ!!」

にとりがこの体験版をもっと洗練させて新しいゲームを作ったら雛ちゃんに遊ばせて上げるといつたらずぐに雛ちゃんは元気になりました。

どんなときでも明るいのが雛ちゃんの特徴です。

このゲームが後にちよつとした異変に繋がってくるのですが、それはまた別のお話…

「さて、今日はご馳走でも作ろうかな」

お兄さんがそういつてまた戻っていくと雛ちゃんはまだ散歩に出かけていきました。今日は尺が長くなってしまったので収録が終わりだからです。

そしてにとりが新しい研究を始めたところで今日のお話はおしまいです。

雛ちゃんの生活はこのまま平和に続いていくと誰もが思っていましたか…

「ん？これで終わりなのかい？」

「ええ、次は厄神様が問題を発生させたのでその流れの一部始終を放送予定みたいです  
ね」

「つてことはそろそろ私の出番が来るんだねえ」

「萃香様も出番が増えるのでギヤラを楽しみにしててくださいね。」

にとりと萃香がなにやらこれからのことを話し合っていました。

次回、雛ちゃんに何が起きるのか…それは近日中に明らかになるでしょう。

それまで、お楽しみに…



# 1章：雛ちゃんケツK i c k e r 編

## 雛ちゃん、多額の借金!?

とある国のとある場所。このビルの一室にて国連の総会が開かれました。

「…というわけだ。評議はここまでとする」

「では、今回の議題については全会一致で可決ということではよろしいのかな？」

「異議なし」

「同じくだ」

「どうやら、今回議題にあがっていたとある案が多数決により満場一致で賛成になったみたいですね。」

「…それでは、本案は可決として本日中に該当機構を設立。並びに全世界へと設立する機構のことを発布していくものとする」

「そうして、各国の国連での総会が終結して解散となりました…」

その頃、日本のどこかにあるとされる雛ちゃんTown。

いつもは雛ちゃんをいじっている愉快な仲間たちも最大のピンチが訪れていたので

した。

「雛ちゃん?! いったいどうしたんだこの借用書は?!」

お兄さんが泣いている雛ちゃんの前で驚きを隠せずにいたみたいです。

どうやら、雛ちゃんが渡したのは借金の借用書のようなのです。

「0がすげーいっぱいある!! 何があつたらこうなるんだ?」

お兄さんはいまだに雛ちゃんがいつの間にか作っていた借金のことについて困惑しているみたいです。

「あれから本に色々書いてあつたし親切だったから勧められるがままにたくさん買って、全部契約して、ローンもたくさん組んで…」

雛ちゃんも泣きながらこうなつてしまった経緯について説明をしているみたいです。

「どうやら前回の収録からたくさんのものを買つたり契約したりしていたみたいです  
ね。」

「損はさせませんからとか言われて前金も色々支払つて…」

「どうやら、完全に悪徳会社に騙されていたみたいです。」

「アホ!! 雛ちゃんのアホ!! ドジ厄神!! きんぴらごぼう!!」

お兄さんも流石にこれには大怒り。途方にくれてしまいます。

「わけわかんない金額だよ!! 何を買つたんだい?」

「リゾート地とか、会社とか、惑星とか…」

そんなものたくさん買っては借金が増えるのは当たり前の話。

後悔先に立たず、とはこのことを言います。

「うーん…こんな金額の借金は見たこともないよ。返せる見込みも当てもまつたく見当たらないし、自己破産しても多すぎる。雛ちゃんを売り飛ばすしかないのかな…」

「そんなあ!!何とかならないわけ?」

そういつてお兄さんも頭を抱えてしまいました。

雛ちゃんも流石にこれにはあせりを見せていました。

そこに現れたのはテレビを見ていたにとりでした。

「大変だよ2人とも!!テレビを見てみなよ!!」

にとりは大慌てでテレビのチャンネルをニュース番組に切り替えます。

2人ともテレビの画面を食い入るように見始めました。

『…ここで最新のニュースをお伝えします。先ほど国連が新しい世界機構を設立したとの発表がありました。』

どうやら、国連の発表があったみたいです。

『名称はWHBO。World Hina-CHAN Banter Organization。世界雛ちゃんをいじるとお金をくれる機構、とのこと。』

おや？ちよつと不思議な機構みたいですね。

みんな、テレビに夢中になって国連の発表を視聴しています。

『活動内容はそのまま、雛ちゃんをいじつたものに対して即時資金を提供していくというものでありますが…雛ちゃんにあたる人物や物が何なのかについては不明瞭であり、資金提供の財源やその使い道、設立に踏み切つた理由などのすべてが明かされておらず、政府はこれを国連のタチの悪すぎる悪戯であるとみて…』

そこまで聞いたお兄さんは、なんといきなり雛ちゃんの尻を蹴飛ばしてしまいました。

雛ちゃんは大声を出して尻を押しえています。

「す、すごい！！本当に雛ちゃんのケツを試しに蹴つてみたらいきなりお金が出てきたぞ！！」

どうやら、謎の技術により雛ちゃんをいじるとその場で現金が飛び出してくる不思議なシステムが働いているみたいです。

それを知つたにとりは厄神様をいじるための道具を開発してくると言つて研究室まで駆けていつてしまいました。

「雛ちゃん！！」

「な、何？」

「これは神様がくれたチャンスに違いない!!これでお金を何とか必死に貯めることで雛ちゃんが大量に作ってしまった借金を返済していくんだ!!」

お兄さんは雛ちゃんの頑張りによる借金の返済を提案すると流石に雛ちゃんも動揺してしまいますがお兄さんは引き下がることはありませんでした。

「はあ!?!ちよつとこれどういう事態になってるわけ!?!」

「とやかく言っている場合じゃない!!我々に残された手段はもうこれしかないんだ!!さあ雛ちゃん、そこに立つんだ!!みんなで力を合わせて借金を完済していくぞ!!」

「ひぎゃい!?!」

そういつてお兄さんはどんどん雛ちゃんを蹴飛ばしていきます。

蹴られてリアクションを取っていくとそのたびにお金が増えていっています。

そうしてしばらく蹴り続けていると、お金がそこそこたまってきました。

雛ちゃんは尻をさすって痛がっていますが出てきたお金を拾ったお兄さんが数える  
と、額が50000円にまでなっていました。

そこに、にとりから電話が入ってきたみたいです。

『もしもし、今大丈夫ですか?』

「どうしたんだ?何か進展はあったか!!」

「えっ、私はスルーされるわけ?」

雛ちゃんがまた性懲りもなく騒いでいますがお兄さんはかまわずにとりと電話をしています。

『今の厄神様の役に立つスーパーアイテムを開発してたんですよ!! いいからとにかく研究室まで来てください』

そういつて通信が切られると、お兄さんにとりの研究室まで急いでいきました。

そこにはアイテムをたくさん揃えたにとりが立っていました。

「やあ、よく来てくれたね。研究資金が足りてないからお金は貰いたいんだけど、厄神様をいじるための発明品をたくさん用意してきました。これでたくさん厄神様をいじって借金を返済してってください」

そういつてにとりがたくさんのものを用意してくれました。

中にはいじる雛ちゃんのリアクションを強くさせるためのものもあるみたいですね。

「とりあえず5000円しかないからこの脚力増強靴っていうのと金タライを貰っていい」

そういつてにとりから購入してきたお兄さん。

雛ちゃんはその間水を飲んで休憩していました。芸人魂あふれる雛ちゃんにも休憩は必要なのです。

「雛ちゃん!!にとりがたくさん物を作ってくれたからいつもの収録のように頼んだぞ

!!

「いや、私の意志は!？」

いきなりお兄さんに肩をたたかれたので勢いよく水が吹き出されてしまいました。水はスタツフが後ほどきれいに掃除していつています。

「雛ちゃん、そこに立ってくれるか?」

お兄さんは隣の部屋まで雛ちゃんを連れて行き立つ場所を指定しました。

雛ちゃんがそこに来た瞬間、タライがガン!!と降ってきて頭に命中しました。

痛みが違うせいかな普通に蹴るよりもたくさんのお金が入ったみたいです。

「やっぱり、雛ちゃんのリアクションが大きいとお金も大きくなるみたいだ。」

そうして今度は先ほど買った靴を履いてから雛ちゃんの尻を蹴ると、先ほどよりもやはり多くのお金が入ってきます。

「雛ちゃん、痛いだろうけどこれもみんなのためだ!!」

そういつてしばらくの間雛ちゃんの悲鳴だけが聞こえてきましたとき…

その夜。

お兄さんは先ほどまでに合計で10万円を稼ぎ出しました。

雛ちゃんはとりあえずご飯とお風呂です。収録ではないのでちゃんとゆったり温ま

れるお風呂に入ってくつろいでいます。

その間にお兄さんはまたにとりの研究室まで足を運んできました。

「やあ、いらつしやい。」

「今度は何か出来たかな？」

そういつて2人は情報を共有しあい、今度は新発明だとクリームパイをいくつか購入しました。

今回はサービスで自動的に作ってくれる装置がついてきています。

「ありがとうにとりちゃん。そろそろ最初の返済期日が近いから頑張つていこう。」

そういつて2人が一致団結したその1時間後、作られた大量のパイが雛ちゃんの顔にたくさん炸裂したのは言うまでもありません。

もちろん、使われたパイはスタツフが美味しくいただいているので問題はありませ  
ん。

そして、翌朝を迎えたのです。

「雛ちゃん!!今日は最初の返済期日だ!!」

お兄さんは雛ちゃんをたたき起こし、すぐに朝食を食べさせようとしています。

もちろん、朝ごはんは昨日のパイのあまりです。

「確か、ここから歩いて5分の場所にあるのよね？」



「ああ、だから食べたらずぐに出発だ!!」

そういつて2人だけで食事を済ませて出かける準備を始めました。

ちなみにとりは次の道具の開発のために研究室にお泊り。萃香はしばらく忙しくなるからと留守にしています。

「さあ、行こう!!」

おっと、準備が出来たみたいですね。

そして本当に5分後に返済する銀行まで到着しました。

そこには意外な人物が2人を待っていたのです。

「え、何しているの萃香?」

「そうか、萃香ちゃんが働いていたのはここだったのか!!」

そう、銀行の金融係として働いていたのは萃香だったのです。

「ん?ああ、大きな返済があるからと聞いていたら…いらっしやい」

萃香はいつもの調子で応対しています。

「いやあ、金融業は信用が第一だからね。鬼は隠し事をしないしさせるような真似もしないからつてここで働いていたんだよね」

笑いながら語る萃香だが、やはり雛ちゃんの話なので結構温情的に対応してくれています。

そこは同じ幻想郷出身だからというのもあるのでしょうか。取立てがなかったのも萃香のおかげかもしれませんね。

「とりあえずさ、お金は出来たのかい？」

「ええ、頑張つて稼いできたわ!!」

「どれどれ…うん、確かに今日返済する予定だった20万円。ちゃんと受け取つたよ。」

何とか返済の手続きが終わつた雛ちゃん。しかし更なる試練が待っていたのです。

「ただ、だいぶ滞納しているみたいだね…次の返済は1000万円だ。取り立てたりはしないし、にとりから電話で話を聞いているからね。体を張ってるんだろ？頑張るんだよ」

そういつて話を終えた萃香は20万円の手続きのために奥へと下がっていきました。

「1000万円か…にとりちゃんを信じて俺たちは少しでも稼ぐぞ!!」

「きやあ!!」

相変わらずの調子で尻を蹴るお兄さん。

雛ちゃんは無事に返済することが出来るのでしょうか？

それはまた、次の機会にお話しすることにしましょう…

## 雛ちゃんの借金返済生活!?

雛ちゃんが借金を返済するようになってから数日。

地道に雛ちゃんの尻を蹴飛ばしたりパイを投げつけたりしてお金は貯まってきたい  
ますがまだまだお金は30万円。

とてもではありませんが次の返済で支払う1000万円には到底届いていません。

「うーん、にとりちゃんの研究はそろそろ出来てこないかなあ」

雛ちゃんを蹴っていたお兄さんは、休憩がてらにとりの研究室に向かいました。

「いや私の出番なさすぎでしょ!？」

雛ちゃんは出番の心配をのんきにしてはいますがそんなことを気にしている余裕はありません。

「やあ、いらつしやい。」

にとりがお兄さんを出迎えてくれました。

「新しい道具なら3つくらい出来たよ。どうする?」

そういつてにとりは長いゴムやいかにも屋外で収録するのに使うような浴槽とそれ  
の給湯器のセット、低周波による治療器具を持つてきました。

どれもこれも、バラエティ番組で使われるような仕様になってきているみたいです。「30万で買えるものはあるかい？」

お兄さんが商談に入ります。

もちろんにとりは値切りなんかに応じたりはしません。

「そうだね、ゴムなら19万円で大丈夫だよ。それと5000円で自動で厄神様のケツを蹴る機械も譲ってあげるよ」

そういつてにとりは更に効率よくなるように自動でいじってくれる装置なんかも開発しているみたいです。

「よし、じゃあそれを貰っていくよ」

そうしてにとりから購入した物を持って雛ちゃんのいる部屋に帰ってきました。

「雛ちゃん!!今度はこれを加えてくれないか!!」

「え、何よいきなり」

「カメラ回っているからやらないとギャラは0だよ」

「わかったわよ!!やればいいんだよ!!」

そうして上手く雛ちゃんをコントロールしていきゴムを限界まで引つ張ってから離していく作業を繰り返していくと、今日のうちに一気に300万くらいの金額になりました。

これは、待機している時間の間に自動で蹴つてくれる機械を使って断続的に収入を得たことも大きいです。

そして翌日。

朝は昨日までと同じようにしてお金を稼ぎ、410万稼いでから昼過ぎにとりの研究室に行つて残りの機材を買ってきました。

今回の出費は330万と80万。合計して410万でしたのでちょうど全額使つてしまふ計算です。

「雛ちゃん!!今度はあの有名な熱湯風呂だ!!」

「なんでそんなのばかりくるわけ!?!」

「ギャラのためだ、こうしないと雛ちゃんの仕事はないぞ!!」

「またこの展開なのね…」

その後、雛ちゃんが有名な「絶対押すなよ!!」のネタをやらされたり寝ているところ  
に低周波電流を流されたりと体を張っていった状態で3日ほどが経過して…

「よし、とりあえず10000万何とか稼げたわね…」

流石にお疲れ気味の雛ちゃん。

ここしばらくは休みなく働いていたため、いくら妖怪としての最低限の体の丈夫さがあるとはいえかなり疲労はたまってきていました。

ですが、そのおかげで何とか期限までにお金を稼ぐことが出来たみたいです。  
「雛ちゃん、今日はゆつくり休んでいいよ」

流石にお兄さんも休みがほしくなり、今日は1日休んでいいと告げました。  
ちなみに返済は明日になる予定です。

「ゆつくり休むわ…」

「あ、でも1時間くらいは自動で蹴ってもらいます」

「休みじゃないわよね!？」

「さあ、たまにはにとりちゃんの手伝いでもしてこようかな」

「無視!？」

いくら休みでもそこは相変わらずのようですね。

そうして今日の貴重な休みはいつものように過ぎ去って言ったのです。

そして、夜が明けて朝になりました。

いつものように今日の目覚ましは低周波の電流です。

「ひぎい!？」

「おはよう雛ちゃん」

「毎日これは堪えるわ…」

「今日はラーメンです」

「またスルー!? そしてラーメンにはなかったわよ!」

今日もまたいつものように朝ごはんまでは過ごしたみたいですね。

怒ってメタい発言をしている雛ちゃんも相変わらず可愛らしいです。

「さあ、食べたら萃香ちゃんのとこに返済しに行くぞ!」

そしてお兄さんは雛ちゃんを連れて出かけるよと告げました。

流石に雛ちゃんもそれには従います。

「やあ、今日もお疲れ様」

「今日の返済分よ!」

「どれどれ…よし、確かに受け取ったよ。」

いつもの銀行では雛ちゃんが萃香にお金を渡しているみたいです。

萃香は、ちゃんと1000万円あることを確かめてからまた奥へと引っ込んでいきま  
した。

それで雛ちゃんのお仕事はおしまいです。

しばらくするとまた萃香が戻ってきて次の返済期日と金額を知らせてくれました。

「次は…10億円で期日は半月後みたいだね」

「それでもすごい数字だな…」

「頑張るわよ!!このままじゃどうにもならないんだから!!」

「それでこそ雛ちゃんだ、そりゃあ!!」

「んああ!!いきなり蹴るのはやめてよ!!」

「はははは、相変わらずだねえ。じゃあ、頼んだよ」

そういつてケツを蹴られながらも雛ちゃんの返済生活はまだまだ続くのでありました。

10億円もの金額、半月の間に揃えられるのでしょうか。

それはまた、次回にお話することにしてしましよう…



## 「雛ちゃん、目指せ完済!!」

前回から5日が経った雛ちゃんTown。

雛ちゃんの返済生活はまだまだ続けていました。

「何とか3000万は貯まったけど、まだ10億円には届かないなあ…」

「もつと効率よく出来たらいいけど」

「じゃあ尻向けろ!!」

「ぎゃあ!!」

お兄さんは頭を抱えています。

次の返済期日は後10日。今ある雛ちゃんをいじる道具では到底間に合いそうにありません。

とりあえず雛ちゃんの尻を蹴飛ばしたお兄さんは自動で雛ちゃんを蹴ってくれる機械とこの5日間の間にとりから買った自動で顔にパイを投げる機械と不定期に電流を流す機械を起動させて一人で金を稼いでもらっている間に自分はまたにとりの研究所まで足を運びました。

雛ちゃんもカメラが回っているからか割とリアクションは激しくとってくれている

みたいです。

「どんどんお金が入ってきています。」

「やあ、いらつしやい」

「今度はどんな道具が出来たかな？」

「そうだね…」

お兄さんにとりは今後のことを話し合っています。

ちなみに雛ちゃんを映しているカメラはこのモニターに映像が送っているので雛ちゃんのリアクション芸は丸わかりになってきているみたいです。

「今回はこれなんかどうだろうか。二人羽織が出来る大きな着物と厄神様をびっくりさせるのに使える小さな爆薬セット。そしてコンロと鍋がセットになった定番あつあつおでんセット。どれも私の自信作さ」

「よし、今は手元に3000万あるから着物を買っていくよ。」

そうしてお兄さんは1300万で大きな着物を、そして余ったお金で少し電流を強化するスイッチとタライをより高いところから落とせるクレーンをにとりから仕入れてまた帰ってきました。

「お、おかえり…」

「雛ちゃん、お疲れ様」

「そろそろ休んでいいかしら?」

「電流を強化します」

「ぎゃあああ!!」

とりあえず先に電流を強化したお兄さん。

雛ちゃんのリアクションがより大きくなったからか1回にもらえるお金が増えたみたいですね。

そしてオート装置の電源をすべて切って1度お昼ご飯。

「今日はいつも頑張っているからケーキを用意しておいたよ」

「やったあ!! ついに頑張りが報われたのね!!」

「そおい!!」

「ぶっ!!」

もはや恒例行事ですね。

またもやケーキを顔面に叩きつけられる雛ちゃん。

叩きつけられたケーキをスタツフが美味しくいただくのも定番になりました。

ちなみにケーキを叩きつけるいじりはこの雛ちゃんケツK i c k e rには存在しません。

「じゃあやるなよ!!」

「雛ちゃん、いきなり空に向かって叫んでどうしたの？」

なにやら雛ちゃんは叫んでいますですがそんな雛ちゃんも可愛すぎて仕方ありません。

流石は幻想郷で一番の美少女です。

「さて、今日から雛ちゃんには新しいリアクションをしてもらいます」

「いやリアクション前提かよ!!」

「まずはとりあえず尻を蹴りましょう」

「ひびい!!」

まずは挨拶代わりに一回蹴りつけたお兄さんは着物を被って雛ちゃんに後ろから抱きつきます。

雛ちゃんはお昼ご飯のラーメンを食べるためにテーブルに向かっていきます。

「あら、どうしたの？」

「こうするのさ!!」

「ぶふおっ!!」

そうして雛ちゃんに着物ごと被さり二人羽織の体制になったお兄さんはいきなりどんびりを持って雛ちゃんの顔に『そおい!!』とたたきつけました。

こうして入ったお金はかなりの金額になったみたいですね。

もちろんラーメンもスタツフが美味しくいただいています。

「あつちやああ!!」

「まだ食べ物ならあるよ」

「ぶっ!!」

そうしてどんどん顔に食事を叩きつけているといつの間にかお金が1億に達してしまいました。

「ふう、今日はこれくらい稼げたらいいかな」

「やつと休めるのね」

「とりあえず尻は自動で蹴ってもらっておくか」

「んぎゃあ!!」

こうしてまたお金を稼いだお兄さん。

翌日、更に300万程増やしたお兄さんは昨日の様に自動でいじってもらっている間ににとりの研究施設に向かいました。

「にとりちゃん、今日は爆薬を買っていつでもいいかな?」

「いいよ、何ならこのプレゼント箱に仕込んでおくといい。お題はサービスしておくよ」

「ありがとうにとりちゃん。これはお礼だよ」

そういつて研究資金を手渡したお兄さんはまた道具を持ち帰り、雛ちゃんの部屋にプレゼントをいくつか忍ばせ本人にもプレゼントを渡しておきました。

その後雛ちゃんの部屋では彼女の悲鳴と小さな爆発音が鳴り響いたのは、言うまでもありませんね…

そして更にこんな調子で1週間が経過しました。

更にとりからあつあつおでんセットを譲り受け、おかげで現在はゆつくりとお金を稼いでいる現状です。

今は、8億ちよつとが貯まっている状態です。

「我ながらよく頑張ったわね…」

「よく頑張った雛ちゃんにはゲームには登場しないとつても美味しいキャンディをあげよう」

「やったわ!!」

こうして喜んだ雛ちゃん。

しかし、これでもお金は入っているみたいですね。

お兄さんはさりげなくデータとして記録しています。

これは、にとりに提出して後々役に立ててもらうためです。

厳しいことをしているだけではリアクション芸も成り立たないのです。

「さて、今日の一蹴り」

「ぎゃあ!!」

…あーあ、また元の日常に戻ってしまいましたね。

でも満更でもない雛ちゃんは輝いているようにも見えますね。

そして、約束の日がやってきました。

また2人で萃香の働いている銀行までやってきました。

「やあやあ、今日も返済の日みたいだね」

「頑張つて稼いできたわ!!」

「どれどれ…うん、確かに受け取ったよ」

いつものように萃香と次のやり取りをして帰宅していく雛ちゃん。

今回は更に5億の貯金をしたうえで次の返済を貯めはじめとなります。

次の期限もまた半月後。しかし金額は2000億も貯めなくてはなりません。

「え、私の出番これで終わりなの?」

「うーん、元の雛ちゃんケツKickerで萃香ちゃんの出番がここでしたかかったかなあ」

「もうちよつとくらい出番があつたっていいだろ?」

「このゲームの話が終わったら次は萃香ちゃん大活躍だよ」

お兄さんと萃香はどうやら早速次のゲームの話をしているみたいです。

おお、メタいメタい。

そんなことはさておき、  
雛ちゃんの活躍はまだまだ続きます…



## 雛ちゃんいじり、返済生活？

今日も今日とて雛ちゃんは借金の返済生活。

最初は20万の返済で始まったこの生活も今回でついに2000億円の返済額です。

まだまだ伸びるんだから雛ちゃんの借金はすごい金額です。

今日は、前回返済してから3日が経過した時点から始まるみたいです。

「おはよう雛ちゃん!!」

「んぎゃんぎゃん!!」

「さあ、今日もバリバリ稼ごぞ!!」

「いや最近電流の強さ、日に日に強くなっているでしょ!!」

最近の雛ちゃんの朝はこの低周波治療器の電流による目覚ましで始まります。

厄神と『神』の文字がついてはいますが体は妖怪。幻想郷の外で力が落ちていてもその頑丈さはある程度残されているからこそその目覚めですね。

「さて、今日は先にとりの研究所に行つてから仕事を始めるからゆっくりしてよ」

「また何かあるんじゃない?」

「今日はいついでに機械のメンテナンスをしてもらおうので本当に朝はゆっくりしていい」

「よ。」

「じゃあ起こさないでよ…」

こんなやり取りがありましたがお兄さんはかまわずに鳥の研究所に行きます。

「近所なのですぐについてしまいますね。」

「おや、今日は機械のメンテナンスかい？」

「あとでまた回収しに来るから先に次の道具がほしいかな」

「そうだなあ、今回はこんなものでどうだい？」

そういつてにとりはちよつと大きなスプリンクラーのような何かとトラの写真、そして油性のマジックペンを持ってきました。

「今回はすごいよ？南米からトラをちゃんと合法的な手段で連れてきたんだ。後は厄神様の顔に冷たい水をかける特製のスプリンクラーに特別製のインクを使ったマジックペンだよ」

「よし、トラを買うにはちよつとだけ足りないからそのスプリンクラーだけ買っていくよ。」

そういつてお兄さんは自動でいじつてくれる装置をすべてにとりに預けて代わりに冷水装置を持って部屋へと戻っていききました。

簡単に取り付けられると言われた通りお兄さんが器用なのもありすぐに装置は壁に

取り付けられました。

ちなみに取り付けたのは以前熱湯風呂を取り付けた部屋です。

ここも描写がないだけで実はかなり使われていたりします。

「雛ちゃん、またプレゼントを用意したから取りに行つてくれないか？」

「いやプレゼントなら今ここで渡せばいいでしょ？」

「お風呂道具なので風呂がある場所に置いてあります」

「じゃあわざわざプレゼントとか言わなくていいわよね!？」

もうすっかり慣れてしまったこのやり取り。

そうして雛ちゃんは冷水装置がある部屋まで道具を取りに行きました。

もちろん、カメラはちゃんと回っています。

「これね…あら、何かしら」

雛ちゃんは取り付けられた如何にも水が出ますと言わんばかりの冷水装置が気に入り、その穴が開いた部分を覗いてみるといきなり冷たい水が雛ちゃんの顔に勢いよく大量に放たれました。

もちろん、雛ちゃんの上半身はびしょ濡れになりました。

「大成功!!」

「いや風邪引いたらどうするのよ!!」

「じゃあアレをやろう」

「あの風呂熱いじゃない!!」

「でもやらないとギヤラはありません」

「やればいいんでしょ!!」

その後、たくさん『絶対押すなよ!!』の有名なネタと冷水装置による二重のいじりをやりましたとき。

めでたし、めでたさ…

「いやまだ終わってないからね!」

「最近雛ちゃんどうしたの?」

失礼失礼。でも、これを繰り返したことで今日だけで既に30億貯まってしまうた。

機械を買った余りが5億なので既に今は35億ある計算です。

それから更に3日が経過しました。

現在の資金は100億円。

昨日のペースで順調に稼いでいった結果です。

ちなみに自動いじり機械は冷水装置を取り付けた翌朝また引き取ってきたため今日は雛ちゃんをいじるのは機械に任せてお兄さんは今、にとりの研究所に来ています。

「やあ、今日はどうしたんだい?」

「お金が貯まったから新しい道具を取りに来たよ」

そういつてお兄さんはトラを回収しようと思いました。

流石に家を専用に改装したので今日はとりも一緒に家に帰り、早速地下室を改装し始めました。

その日は流石に仕事にならないので機能までと同じように稼いでまた30億を稼いできたみたいですね。

翌日、雛ちゃんを連れて地下室にやってきました。

「さあ、今日はこの地下室で収録をするぞ」

「何、牢獄ネタ!?!」

「今雛ちゃんがいる部屋にこれから興奮剤を与えたトラがやってきます」

「いやなんてもん与えてるのよ!!」

お兄さんが地下にまた新設された監視室に入りスイッチを押すと本当にオリで隔てられた先にトラが出現、興奮剤を与えられているためかなり激しく暴れまわっています。

「いやああああ!!!」

トラが暴れまわり雛ちゃんが怯える度にお金がどんどん入ってきます。

この日はこのトラだけで合計600億は稼ぎ出しました。

その翌日に改めて油性ペンを購入し、雛ちゃんの部屋のあちこちに落書きをして悲鳴を上げた雛ちゃんがいたとか：

そうして色々稼いでいたら早くも2000億突破。

期日の前日には既に1兆を貯め込んでいました。

「やっとうこまで稼げたわね…」

「雛ちゃん、お疲れ様」

「でももうすぐ終わる!!」

「いやまだ終わらないみたいだぞ、それ」

「んぎゃあ!!」

そしてこんな調子のまま夜になり朝がきて…

「やおおはよう」

「約束の2000億、耳を揃えて返しに来たわ!!」

「ん、どうやら本当にあるみたいだねえ」

「次もまた返してやるんだから!!」

いつもの調子でのんびりとした様子で萃香が確認する中雛ちゃんはドヤ顔で自慢げに語っています。

いや本当に雛ちゃんは可愛いです。

「次はどうなんだい?」

「…また半月後に今度は50兆…」

「…」

これにはお兄さんも返す言葉がありません。

雛ちゃんも先ほどまでのドヤ顔はどこへやら。

すっかり意気消沈しています。

「はいご褒美のアメちゃん」

「もう、しょうがないわねえ♪」

アメちゃんひとつでご機嫌を取り戻した雛ちゃん。

「頑張れ雛ちゃん!!金額はでかいが完済はもうすぐだぞ!!」

## 雛ちゃんの借金返済!!後半戦

雛ちゃんの借金生活も、かなりの時間が経過しました。

前回2000億円を返済してから3日が経過して蓄えは2兆2500億円。

雛ちゃんのリアクションもたくさん増えてお金もどんどん貯まっていつています。

「ふう、やっとここまでまた貯まってきたわね」

「でも50兆なんて金額、期日までに貯まるかなあ」

「貯まるかどうかじゃないわ、貯めなきゃならないのよ!!」

「よしその意気だ雛ちゃん!!」

「ぎゃあ!!」

今日も今日とて尻を蹴られる雛ちゃん。

蹴られて涙目の雛ちゃんも可愛いものです。

「さて、そろそろまたにとりちゃんが新しい道具を開発している頃かな」

「またあの部屋で過ごさなきゃならないのね…」

お兄さんはそういつて雛ちゃんを前回使ったトラ飼育部屋に連れ込み、例の自動いじり装置の数々をフル稼働させてにとりの研究室に出かけていきました。



「やあ、いらつしやい」

「こんだけあつたら何か買えないかな?」

「それだけあれば今回用意したものを2つとも買えるよ」

そういつてにとりは雛ちゃんが気に入りそうなイスとからしを持ってきました。

からはどうやらお菓子にカムフラージュしてあるみたいです。

「このイスは座つたら電流が流れる仕組みになつているんだ。ビリつときて厄神様のリアクションもさぞかし大きいだろうね」

「よし、両方買つていこう」

「まいどあり〜」

お兄さんは意気揚々と雛ちゃんの待つているトラ飼育部屋に行きます。

既にこの短い間に1000億円がたまっていたみたいです。

「雛ちゃん、大変だろうからイスとお菓子を用意してきたよ」

「あら、気が利くわね」

「イスには電流、お菓子にはからしがそれぞれ仕込まれています」

「ひぎいいい!!」

一気に攻められた雛ちゃん。

おかげで一気にお金が増えていきました。

これなら50兆円も余裕でしょう。

「ふう、やっと楽になれるわね」

「まだだ!!まだ終わらんよ!!」

「もう尻が腫れてるのよ」

雛ちゃんもしつかりとケツを蹴られながらもなんとかここまでたどり着くことが出来ました。

こうして残りの日数が消化され、約束の日になってきました。

「やあやあ、50兆円持ってきたのかい？」

「ええ、このとおりよ!!」

「うーん、現実では見られない世界だなあ」

「おや、あんたが珍しくメタ発言するなんてねえ…よし、お金は確かに受け取ったよ」

いつもの銀行にて萃香と3人でいつものように金銭のやり取りをしていました。

やがて戻ってきた萃香は笑顔になり最後の試練を雛ちゃんに課していきました。

「次で最後の返済だよ。いつも通り半月後に今度は20京円さ」

「に、20京?!」

「なあに、にとりから頑張りは聞いているさ。頑張ってくれよ?」

萃香から励まされた雛ちゃん。

さあ、最後の返済はもうすぐだ!!

そして3日後。

そこにはにとりが雇ったムエタイの選手が雛ちゃんの尻を蹴っている姿がありました。

「いやどういふ状況なのよ!?!」

「文句はたつた1000文字ちよつとしか書けなかつた筆者に言え!!」

「H A H A H A ☆ミミーの蹴りは世界一ネ!!」

「いやああ!!」

…そのようなことがあろうはずがございません。

というわけで、今回はこんな日常シーンから物語が再開していきます。

お金は現在1000兆円。残りは10日ちよつとみたいですね。

「さて、今日にはにとりの研究所にいこうかな」

「今日はちよつと私も休むわね…」

ちよつと疲労がたまってきた雛ちゃん。

雛ちゃんを休ませている間お兄さんにはにとりの研究所にやってきました。

「やあ、もうすぐ返済だね」

「そうなんだよ、最後の研究道具というものを買わせてもらえないかな」  
「ちよつと待っててね」

お兄さんは雇われたムエタイ選手と始めましての挨拶を交わしたときにとりからこう言われていました。

「最後のとつておき。もうすぐ完成するから楽しみにしていてよ」

その言葉を信じたお兄さんにはにとりとの約束のために今日訪れたのです。

「最後はこれだよ」

「これって、何もないじゃないか」

「厄神様をたまには大事にしてあげなよ」

「なるほど……」

にとりが話したのは、雛ちゃんをなでなでしたりしてあげること。

前に雛ちゃんに優しくしてあげたときにもお金が入ったことを知ったにとりが最後の提案をしたというわけです。

「じゃあ、行ってくるよ」

「たまにはねぎらつてあげるんだよ」

そういつてにとりは今回の収入を電卓で計算し始めました。

近くには手紙が置いてあります。

『拝啓、河城にとり様。日々の活躍、本当にお疲れ様です。この度、あなたは東方心気楼への参戦が決定しましたのでお知らせいたします。つきましては幻想郷に今度お戻りいただき並み居る強者との闘いをしていただきたいと思います。これからの活躍、心よりお祈りしております。黄昏フロンティア』

：にとりは雛ちゃんと違ってかなり忙しくなるみたいですね。

え、背景には雛ちゃんや萃香もいるって？

まあまあ、とりあえずまずは雛ちゃんの借金返済の終わりを見届けましょうよ。

「あら、どうしたの？」

「雛ちゃん、いつもお疲れ様」

「どうしたのよ、変な日ねえ〜」

お兄さんが雛ちゃんをねぎらっていると今までの非ではない量のお金が入ってきました。

「いやなんで?!」

「さあ?」

さて、こうして雛ちゃんは約束の日までに何とか20京を稼ぎ出せたのでした。

約束の日、萃香はいつもの場所で待っていました。

「さて、最後の日だね。お金はあるかい?」

「もちろんよ!!」

「どれどれ…うん、確かに受け取ったよ。これで借金は完済さ。お疲れ様」

ついに借金を完済した雛ちゃん。

手続きがあるから先に帰ってくれよといった萃香を残し帰宅した2人はにとりも交えて改めて3人で祝福しました。

「やったぞ!! ついに借金を全部返済しきったんだ!!」

「ついにやったのね…」

「でも、よくまああんな金額を返せましたねー」

「雛ちゃんの努力の賜物だな!!」

お兄さんもとりも雛ちゃんを祝福してくれています。

もうすぐ萃香も帰ってくることでしよう。そうしたらみんなでパーティとなるのでしよう。

「努力っていうか、私は耐え忍んでいただけなんだけどね」

「さて、萃香ちゃんが来るまで時間もあるし借金も消えた。そこで…」

お兄さんは疲れきった雛ちゃんを前にして足を上げ…

「雛ちゃんのケツを蹴りまくって金をまたたくさん稼いでやる!!」

「いやああ!! もうケツ蹴りはいいわよ!!」

そうして欲に目がくらんだお兄さんがまた雛ちゃんの尻を蹴ろうとしたところ、にとりに引き止められたみたいです。

「あれ、なんか緊急特番が始まったみたいですよ?」

「緊急特番?」

そうして雛ちゃんも含めみんなでテレビに釘付けになりました。

『番組の途中ですが、ニュースをお伝えします。国連はこの前新しく設立した世界機構、W H B O を解体することを発表しました。国連は、買いたい理由として存在意義のなさを提言し、何故設立したのか?何か謎の意思に操られていたのではないか、とコメントしており、日本政府は…』

ここまで視聴した3人。

すっかり無言になってしまいました。

「お金の出所、なくなっちゃいましたね」

「これで私もやつと平穏な生活をすごせるわけで…」

にとりがばやき、雛ちゃんは安堵したみたいです。

お兄さんも機構がなくなったのなら仕方ないと諦め…

「諦めると思っていたのか?関係なく蹴っ飛ばしてやるからケツ出せ!!」

「ええええ…もうケツ蹴りなんて、こりこりよ〜!!」

こうしていつもの生活に戻った雛ちゃん。  
彼女たちの活躍は、まだまだ続くのでした。